

「第三の皮膚」論

東北芸術工科大学情報デザイン学科
幸村真佐男

概要

メディア・スーツやVRゴーグルに代表される電子化された装置と人間の身体性について論ずる。

The Theory of "Skin Three"

Masao Komura

Department of Informatique Design
Touhoku University Art and Design

Abstract

In this paper, the electronic devices such as the media suits and VR goggle, and the characteristics of human beings will be discussed.

第一の皮膚 内と外との境界

皮膚は物質代謝系における生物個体の内と外との境界である。トポロジカルには人間は管構造をしている。バックミンスターフラーは立花隆との対談で宇宙においては左右とか前後とか上下とかでなしに'内と外'の概念が重要になると指摘した。類的な存在として人間をとらえるとそのときの物質的な内と外との境界はどのようになるだろうか。その形態を明確に認識するのは難しい。都市が一つの共同体の形態あらわすならばその都市の発展と衰退のあり様を可視化することはできる。

皮膚の持つ触覚感覚は他の諸感覚器官の原型をなす。

第二の皮膚 衣服の発生

人類の発達史における衣服の起源を位置づけると次のようになる。

言語の獲得



直立歩行（森林からサバンナへ）



道具の制作（石器の使用）



火の獲得

土器の制作

衣服の着用



文字の使用

巣（家）を造る動物はいても、服をまとう動物は人間以外にいない。

いわゆる裸族と呼ばれているイリアンジャヤ（ニューギニア島）のダニ族でもキオというペニスケースをつけ、腰には紐をまきつけ、子安貝のワリモケンをつけている。リーフェンシュタールの写真集‘ヌバ’やヴェラ・レーンドルフの‘ヴェルーシェカ

(変容)’に見るように身体変形と身体装飾、化粧と着衣行為との間には非常に強い関係がある。

衣服の発達には基本的には裸と衣服の対立を軸としてきた。どこを被いどこを見せるか。恥ずかしいから着るのではなしに着るから恥ずかしい。羞恥心は被い隠すことによって初めて発生する。衣服の発生に関する一つの重要な指摘はその象徴機能に注目する。衣服はシンボルである。地位や富をあらわし、異性を強くひきつけようとする。また着る人の思想や内面を表現する。

ナイロンやポリエステル等の合成繊維の発達によってパンスト、ボディースーツ、レオタード、スパッツなど身体に密着する衣服がファッションの状況を変えている。ある意味で第二の皮膚の完成といえる。

衣服と建築と移動体（ヴィグル）の間には様々な関係がありその中間種が存在する。

フトン、コタツ、カヤ、テント、パオ、モービルハウス・・・人間と自然環境の間には様々なメディアを介在させる。

第三の皮膚 電子化された皮膚

アメリカのポップアートの作家である、オルデンバーグは60年代に「ソフトタイプライター」「ソフトトイレット」などの作品を発表した。

メディアスーツと仮想現実

90年代電子機器は物理的にソフト化しますます環境化してきている。強誘電性の液晶は環境全体を表示系に変える。

ジェット機のヘッドアップディスプレイの技術は自動車のリアウィンドウに応用されナビゲーションシステムの表示系や計器類の表示系として大きく変わろうとしている。それと同じ事が人間のヘッドマウンテッドディスプレイ（HMD）にも起ころうとしている。液晶技術の発展によって、ヴィジュアルウォークマンともいべきゴーグルが造られ現実の風景と参照系の情報が同時に見れるようになる。

さまざまなセンサーを装着して外界を可視化させる。電話やネットワークと接続されることによってメディアスーツとなる。服のように肉体に纏わりつき時計のように持たないどこか落ち着かない心理作用を持つようになる。社会的環境に裸のままに対置できないようにメディアスーツがないといられなくなる。

マックルハーンが提唱するグローバルヴィレッジが現実のものとなる。類的な存在としての人間の思考の大部分が集会的無意識と呼ばれる領域であるように、近代がデカルト的自我意識が幻想であることに気づくだろう。

『われわれは情報や社会的・情動的なコミュニケーションを、仲間や友人や同じ感心を持った「見知らぬ人」と大量に交換する「ネットワーク国家」となるだろう。・・・われわれは「地球村」になるのだ。・・・一人の個人が文字どおり国のどこでも、あるいは世界

のどこでも働き、買物をし、教育を受けたり、いっしょに勉強したりすることができるようになるのだ。』

そのような共同体を実現し得る、様々なメディアが作られ用意されつつある。そしてその行き着く先は惑星ソラリスで展開する次のような光景かも知れない。

『擬態活動を眺めていると、忘れ得ない印象が次から次へと湧いてくる。超自然で異様なものが作られはじめるときには、海は<創造意欲の高揚>を味わっているように見える。そのような時には、海は周囲のさまざまなヴァリエーションを創り出したり、それらを組み合わせて複雑な形を創り出したり、あるいは<形式の抽象>をやったりして、何時間でもぶっつけにその仕事を楽しんでいる。

「ソラリスの海は生きていて、しかも理性的な存在である」』・・・惑星ソラリス
それとも観念の形而上学の復活であろうか。

形而上なるものこれを道といい、形而下なるものこれを器という。[易経、繫辞上傳]